小説 壬申の乱

星空の帝王

樋口茂子

PHP文庫

著者紹介

樋口茂子（ひぐち　しげこ）

昭和3年、静岡県清水市生まれ。昭和7年に渡満し、幼少時を満州で過ごす。昭和20年、京都市立堀川高女卒。

主な著書に『非情の庭』（潮出版社）、『凍土』（三一書房）、『古代幻想の旅』（カイガイ出版）、『自分史の作成と鑑賞』（春秋社）、『三十六歌仙の舞台』（京都新聞社）などがある。

PHP文庫　小説　壬申の乱
——星空の帝王

1996年5月15日　第1版第1刷

著　者　樋口茂子
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町3-10
第四出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431

印刷所
製本所　大日本印刷株式会社

© Shigeko Higuchi 1996 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-56894-7

小説 壬申の乱

星空の帝王

樋口茂子

PHP文庫

○本表紙図柄＝ロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
○紋章＝上田晃郷

小説　壬申の乱【目次】

第一部　大津朝廷

第一章　深閨の皇女　9
第二章　妻問いの初夜　32
第三章　太陽の夢　57
第四章　天皇崩御　85
第五章　天帝の星　116

第二部　雌伏の時

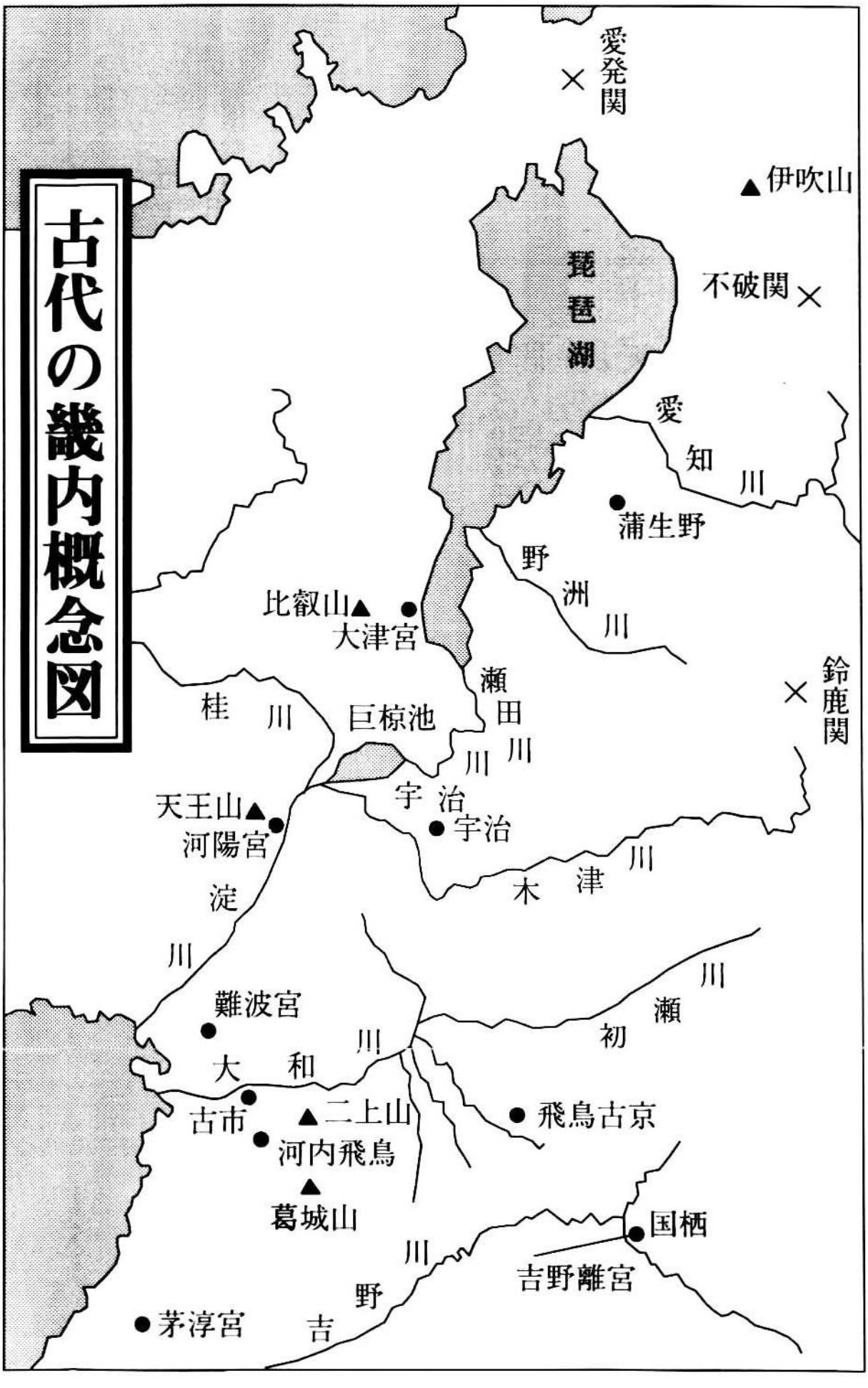
第一章　吉野の前皇太子　153

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

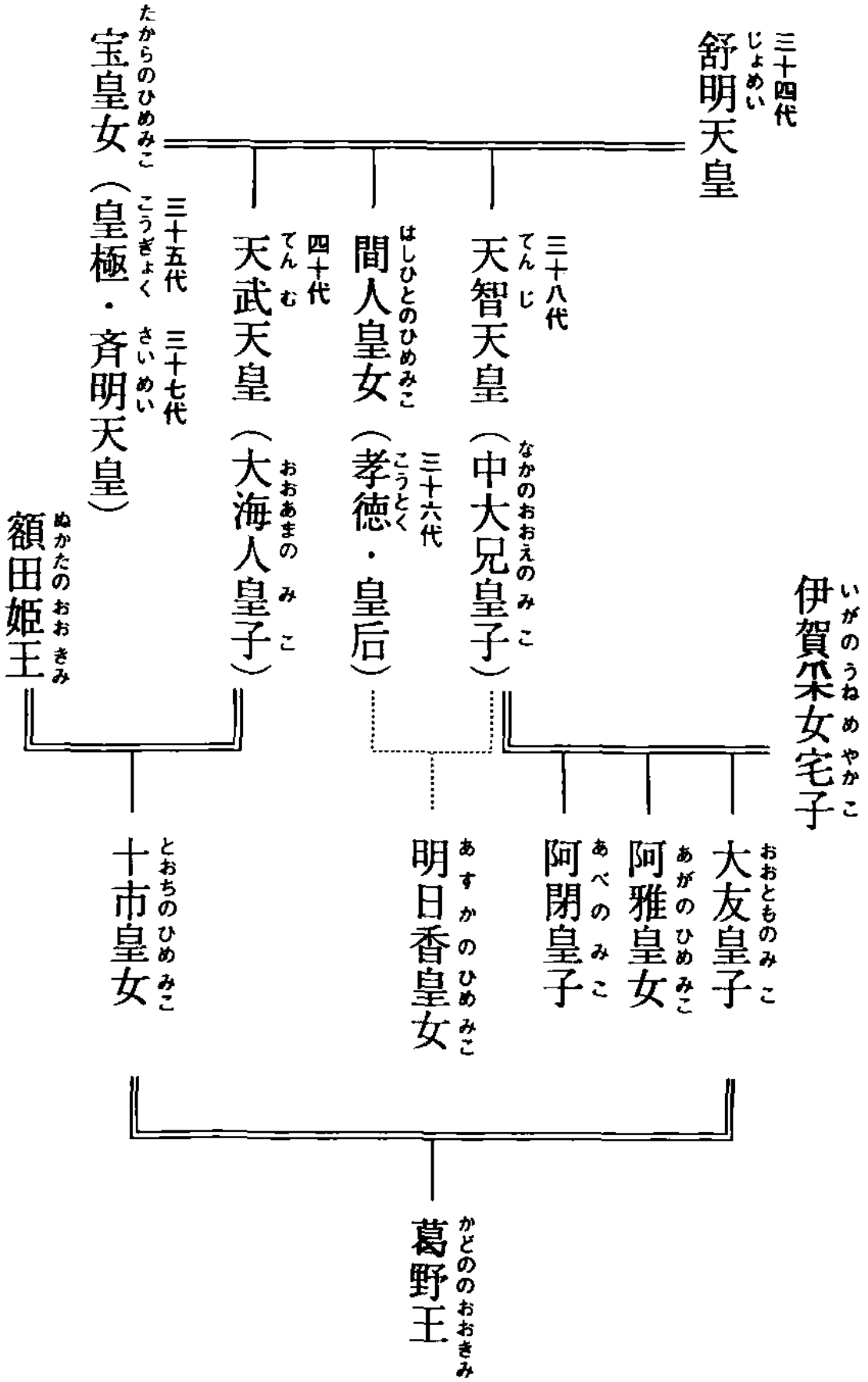
第二章　玄武と朱鳥　178
第三章　太陽神　209
第四章　河陽宮の皇女　236
第五章　吉野出陣　267

第三部　壬申の乱

第一章　朱鳥軍団　293
第二章　羽林天軍　330
第三章　星々の戦い　359
第四章　流星群　388
第五章　即位の祭壇　413
あとがき


古代の畿内概念図
愛発関
伊吹山
琵琶湖
不破関
愛知川
蒲生野
野洲川
比叡山
大津宮
鈴鹿関
瀬田川
桂川
巨椋池
宇治川
天王山
河陽宮
宇治
木津川
淀川
難波宮
瀬川
初川
大和川
古市
二上山
飛鳥古京
河内飛鳥
葛城山
国栖
吉野離宮
吉野川
茅渟宮

『小説・壬申の乱』登場人物系図



第一部　大津朝廷

第一章　深閨の皇女

一

凩の音が聞こえている。比叡おろしの音である。

第三十八代・天智天皇の十年、西暦六七一年陰暦十月末、太政大臣・大友皇子は、父・天智天皇の枕辺にはべり、吹きすさぶ比叡おろしの音を聞いている。沈黙のうちに、すでにひとき余りの時が過ぎた。大臣たちも舎人たちも退き、大友皇子一人、病める天皇の御側にはべっている。

すでに夕刻になろうという時間である。此処、比叡山系を西にいただく、その中腹の大津宮の夕昏れは早い。櫺子窓の明りはうすく、すでに部屋は、仄かな夕闇にひたされ、病み伏す天皇の顔は、塚への葬りの時を待つ殯の宮にさらされたむくろのように暗い。黒く落ちくぼんだ眼窩の陰に、その目の表情は見えない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

再び、天皇の唇が、わずかに動く。大友は天皇の顔の上に、己が顔を寄せ、その仰せを知ろうとつとめる。

「あすか……はしひと」

大友は、天皇のうめきに似たかすかな声と唇の動きから、その云わんとすることをさとった。

声はとだえ、うす闇の中に天皇は黙した。

大友皇子は紫衣の腕を組み、黒い塑像のような深い沈思の姿にかえった。先年、越の国より献上された燃ゆる土、石炭の火が、青や赤の炎となって、金銅の火桶をもれ、うす闇に光りはじめている。

今、死の床にある天皇のみおもいが、ひたひたと大友の胸にかよってくる。沈水香のかおりと、病む人のにおいが、おもく部屋にこもっている。漏刻の音が時をきざむ。

相変らず戸外は風が吹きすさんでいる。氷片のような、するどい寒気が吹きこむ。天皇は、太后・間人皇女に、そして深閨のひと・明日香皇女に、心を残されている……。大友は顔を、あげ、耳をすました。風の音に、きれぎれに歌声がまじる。が、じっと耳をすますと、吹き荒れる風の音、きしみあう木立、遠吠えに似た山のうなりのみ……。全く人声はない。

が、やはり童謡は聞こえてくる。

「打橋の　集楽の遊に　出でませ子　玉手の家の　八重籠の刀自
出でましの　悔はあらじぞ　出でませ子
玉手の家の　八重籠の刀自」

大友は、わびしく心づく。それは大友の、胸の内の声である。

今日も、自分の宮殿からこの皇居への来がけに、大友はその童謡を聞いた。丈高い冬枯れの草むらの奥から、大友の後を先を縫うようにして、その歌は、幾度となく聞こえてきたのだ。従者たちも、その歌声を聞いた。が、皆黙したまま、言葉を発しようとはしない。宮廷内の人人は、その歌をおそれている。

（板橋のたもとの遊びに、出ていらっしゃいよ、可愛いお姫さま。それに玉手の家の奥深くこもっていらっしゃる御夫人よ。

出ておいでになっても、くやんだりなさることはありますまいよ。出ていらっしゃいよ、可愛いお姫さま。それに玉手の家の、幾重もの囲いの中に籠っていらっしゃる貴い御夫人よ）

大友皇子が初めてその童謡を耳にしたのは、都がこの大津に移ってまもない、天智七年の夏頃のことであった。

かくされた二人の女性――。それは宮廷の奥深く秘められていた筈のことである。が、民草（たみくさ）はさとくも、それを童謡にして歌い始めたのである。

昨年の春、法隆寺が全焼して以来、その童謡は、まるではやり病いのひろがるように、都中の集落に野辺に歌われている。もはやそれは、公然の秘密というしかなかった。

現に今、大友皇子は、父・天皇と共に、その童謡に歌われている姫と貴夫人のおとずれを、待っているのである。

部屋はほとんど闇にひとしい。ようやく燭台がはこばれてきた。

大友皇子は、赤い灯火の中に、くっきりと若い姿を浮かべた。濃い眉、一点を凝視する鋭く澄んだ眸……。大友皇子は、厳しい鮮烈な横顔を闇に刻み、相変らず、深い沈思の姿である。采女は尊い父子を懼れ、影のようにひっそりと部屋を去った。

病みやつれた天皇の顔は、ほとんど表情というものがない。黒い空洞のような目を見ひらき、どこか遠い世界を見つめている。

遠い世界――。大友は、父・天皇の見つめる、その遠い世界を、じかに胸に感じる。大友は知っている。天皇の御胸のうちは、今、鮮やかに醒めていることを。

ふいに、大友の固い沈思の姿がくずれた。かすかに、人の気配が近づいてくる。

闇を背に、仄かに白い姿を浮かべたのは、天智天皇の同母妹、太后・間人皇女であった。すでに世に亡き人とされているその人は、清い尼僧の姿であった。

そして、その背後に、闇の明るむように、白く鮮やかに、乙女の顔が浮かんで見える。

一瞬、大友は息をつめた。ふいにきた激しい鼓動であった。大友は、間人皇女の横に立ったその乙女にむかって、無意識に歩を進めていた。

乙女は、あたりの人を意にとめぬ、楚々とした自然の立居である。今、この世に生まれたかのような無垢の表情で、自分に近づく若い貴公子に、じっと明るい視線をあてている。

大友は、洗い浄められる自分を感じた。すがすがしいよろこびが、全身に満ちあふれてくる。今、自分の目前にいる、この清く美しい乙女こそ、決して人目にふれることなく、宮廷の奥深くかくされていた、深閨の佳人・明日香皇女そのひとである。やや長身の、細くしなやか

な、間人皇女によく似かよった体つきの乙女である。
大友は足を止めた。間人皇女にうながされて、乙女が天皇のおそばへと、歩みはじめたからである。大友は、ゆっくり闇を動く乙女の顔に、星々の輪のまたたきのように、朱の玉鬘（たまかづら）の輝くのを見た。
大友は、乙女の繊細な横顔を、まともに見るかたちになった。まるで少年のような熱いおののきが、大友のたくましい胸にうずく。
乙女は、天皇の枕辺に置かれた椅子に腰をかけた。間人皇女にされるがままに、天皇の御手を握る。幼い輪郭の横顔、まるい頬を縁どる真直ぐ垂れた黒髪、黒々とした眸、頭を巻く朱の珊瑚の玉鬘……。
大友は新鮮な感動の目で、乙女のすべてを見続けていた。今、この皇女は生まれたのだ。事実、明日香皇女は、生まれて初めて、現実の世に姿をあらわしたのである。おそれも恥らいもしらぬ、裸身の赤子のような無垢そのものの姿を――。
大友は呪縛されたように、身も心も、その乙女にすいよせられてしまっている。
間人皇女が、大友をさしまねいた。大友は魂を失った人のように、皇女のおそばに歩み寄った。間人皇女は身をずらし、明日香皇女と自分の間に、大友をはべらせた。自然、大友は、天皇の寝台にむかって跪（ひざまず）く形になった。間人皇女の右の手には、小さな金の香炉が捧げられている。すでに、御年・四十三歳の筈である。しかしその横顔は、かつての日とすこしの変りもない。神のごとき高貴な美しさである。

間人皇女は立上り、両手で恭しく香炉を捧げた。

「大友を明日香の夫に。そして帝位を大友に」

静かな、抑揚のない口調で、間人皇女は闇にむかって唱えた。つぶやきかけるような、かすかな声であった。が、中皇命――、事実上の天皇として、長くこの国に君臨していた人の、おかしがたい絶対のおもみが籠められている。

闇を透す音声、赤い灯火に浮きたつ全身の表情は、崇高な権威そのものとして、大友の心をうった。

間人皇女は、香炉を大友に与えた。大友はほとんど自身の心というものを持たなかった。ただ熱っぽく感動にうちふるえていた。

大友は立上り、妻と、そして帝位への誓いをのべた。

明日香皇女も、香炉を手にした。大友は、花びらを思わせる美しい唇の、かすかな動きに魅せられていた。が、皇女の誓いの言葉は、凩のせいか全く聞こえなかった。

先ず、明日香皇女が部屋を去った。大友はその時になって初めて、部屋の外に侍女たちがひかえていることを知った。

間人皇女は、真直ぐに身を立て、大友に対した。

「あの御方こそ、帝位を即ぐべき方です。あの皇女の夫に、あなたはえらばれたのです」

常に常に、自身の中の神の御旨のままに生きてきた女人は、更に言葉を継いだ。

「皇子よ、お行きなさい。私たちの皇女のもとへ」

二

間人皇女は、兄、天智天皇の枕辺の椅子に腰かけ、しみじみと病み伏す人に眸をあてた。ようやく兄と妹は、二人ぎりのやすらいだ時間を得たのである。二年ぶりの逢瀬である。が、それにしてもこうも面変りした、もはや生きる望みを絶たれた、兄天皇のお姿を見ようとは。すでにその顔は、灰色の死の影に被われて見える。

天皇は、ときどきかすかに身じろぐ。暗い眼窩の底から、間人皇女を見続けている。その表情は、灰色の死の面をかぶっている。死に近い天皇の目に現実の世界はうすく、発する声もほとんど言葉にはならない。しかしその胸はかつてないまでに清く澄み、妹皇女への悲しいいとしみに満たされているのであった。天皇は、血気さかんな十九歳の自らと、まだ十七歳の楚々とした妹皇女の姿を、鮮明に胸にとらえていた。

今から二十六年昔、皇極天皇の四年・西暦六四五年のこと、当時天智天皇は十九歳、中大兄皇子と呼ばれていた。

第三十四代・舒明天皇が崩じられた後、帝位は皇后・宝皇女が継ぎ、第三十五代・皇極天皇として国をおさめていた。しかし、新興豪族蘇我氏の圧倒的勢力に制せられて、王権は無にひとしく、蘇我氏の長・蝦夷、入鹿の親子が、事実上の為政者であった。特に入鹿は、女帝の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com